JAFスポーツWEB

2019FIAアジアパシフィックラリー選手権第7戦　2019年JAF全日本ラリー選手権第8戦　ラリー北海道［JAF公認No.2019-0020］

開催日：2019年9月20～22日　開催地：北海道　格式：国際　主催：AG.MSC北海道［クラブ登録No.公認01001］

フォト／加藤和由、中島正義、JAFスポーツ編集部　レポート／ JAFスポーツ編集部

新井大輝選手は、実戦では初ドライブとなったVAB WRXを僅か2日間で手なづけてグラベル2勝めとなる勝利をさらった。

新井大輝組がVAB WRXでのデビューウィンを達成！

日本を代表する国際格式ラリーである「ラリー北海道」が、2019年も9月20～22日の3日間、十勝地区を舞台に開催された。

今回も拠点となるのは帯広市で、ラリーのHQは市内の十勝オーバル、サービスパーク及びセレモニアルスタート＆ゴールは同じく帯広市の北愛国交流広場という配置に変更はない。ラリーは今回も、金曜夜の北愛国に隣接する札内スーパーSSで幕を開け（LEG1A）、土曜朝から本格的な戦いが始まった。

今回のLEG1-Bはまず陸別4.63kmを走った後、ヤム・ワッカ23.49km、クンネイワ28.75kmを回るループを2回こなして帯広に戻り（途中、陸別でのリモートサービスあり）、2度めの札内スーパーSSを走ってサービスイン。日曜のLEG2は音更リバース6.12km、ニュー本別13.79kmをこなして北上し、パウセカムイ10.40km、ヌプリパケ12.53kmをこなした後、ノーサービスのまま、再び音更を走り、北愛国に戻ってサービス。そして3度めのスーパーSSを走ってフィニッシュという設定だ。APRCは北愛国のサービスの後、再びニュー本別、パウセカムイを走ってフィニッシュする。SSは計15本でトータル167.11km。リエゾンを含めた総距離は661.09kmと全日本としては、やはり破格のスケールを持つ。APRCは17SS、202.36kmを走る888.33kmのラリーとして行われた。

JN1クラスはやはり今回からVABを投入した新井大輝／小坂典嵩組のスピードに注目が集まった。「VABに乗るのはほぼぶっつけ本番なので、凄く緊張した」と言いながらも、新井大輝組はLEG1から期待に違わぬ速さを見せて勝負所のロングSSをことごとく制覇。2本めのクンネイワもダンパーにトラブルを抱えながらもベストで上がって、2番手の新井敏弘／田中直哉組に15.4秒差をつけて折り返した。

JN1／**1.** 新井大輝／小坂典嵩組はシーズン3勝目をマーク。タイトルが射程距離に入ってきた。**2.** LEG2で猛追を見せた鎌田卓麻／鈴木裕組だったが、一歩及ばず2位。**3.** 鎌田組を最後0.6秒差まで追い詰めた新井敏弘／田中直哉組だったが3位に甘んじた。

JN2・JN3 ／ ***4.*** JN2は優勝候補本命の上原淳／漆戸あゆみ組がマシントラブルでリタイヤとなり、眞貝知志／箕作裕子組が総合8位のタイムで優勝した。***5.8.*** JN3はLEG1で満身創痍となった86を帯広まで運び込んだ曽根崇仁／木村裕介組が待望の今季初優勝をさらった。***6.*** JN2の2位にはラリー北海道を知り尽くすベテラン、中村英一／大矢啓太組が入賞。***7.*** 山本悠太／山本磨美組はマシントラブルでスローダウン。JN3での連勝がストップした。***9.*** JN2の3位にはGT86 CS-R3を駆った鷹野健太郎／ヤナ・ウシニナ組が入った。***10.*** ラリー北海道を得意とする鎌野賢志／蔭山恵組がJN3の3位を獲得した。

JN4・JN5・JN6 ／ ***11.14.*** JN4は古川寛／大久保叡組がLEG1の大量リードを守り切って今季初優勝。***12.13.***「足回りやギア比といったラリー北海道対策が結果に繋がりました」。JN5では石川昌平／竹藪英樹組が2016年の新城ラリー以来となる勝利を獲得。***15.*** JN6は大倉聡／豊田耕司組が開幕からの連勝記録を8に伸ばした。***16.*** パンクで遅れたJN5天野智之／塩田卓史組は2位にとどまった。***17.*** グラベルに入って表彰台常連の中西昌人／福井林賢組。今回もJN6で2位を確保。***18.*** JN4小倉雅俊／平山真理組はブーン勢最上位の2位獲得。***19.*** JN4山口貴利／山田真記子組は3位に食い込んだ。***20.*** JN5の3位には九州の小川剛／佐々木裕一組が入賞。***21.*** JN6水原亜利沙／加勢直毅組はサバイバルラリーを走り抜いて3位獲得。

LEG2に入ると鎌田卓麻／鈴木裕組がSS9, SS10と連続してベストを奪って新井敏弘組をかわして2位に浮上。SS11もセカンドベストで上がって、LEG1での25.7秒のビハインドを6.1秒まで詰めて新井大輝組の背後に迫った。しかし続くSS12 ヌプリパケでは、新井大輝組がこの日初となるベストを奪取。SS13では新井敏弘組にベストは譲るも、ここでも鎌田組を抑えてセカンドベストをマーク。最終のスーパーSS1.47kmを前に9.7秒差まで広げて安全圏を確保して逃げ切り、シーズン通算3勝めをマークした。

前日のトラブルによってダンパーを失ったため、急遽、敏弘選手のWRXのダンパーを装着した大輝選手は、「運転のスタイルが違うので当然なんですけど、ダンパーも動きもまったく違うので戸惑った」と言う。それも影響してSS9ではエンストするなどリズムを崩して苦

APRC／**22.** 86をドライブした小濱勇希／藤田めぐみ組がRC3クラスで優勝を飾った。**23.** RC5クラスではまだ10代という期待の新星、大竹直生／竹下紀子組が優勝。**24.** ラリー北海道の常連、岩下英一／尼子祥一組は今回もしっかりと総合3位に入った。**25.** 観客も度肝を抜かれたCH-Rで図抜けた速さを見せたマイケル・ヤング／グレン・マクニール組がAPRCを制した。**26.** NEWマシンのデビューウィンを飾ったマイケル・ヤング／グレン・マクニール組とCUSCO RACINGのチームスタッフの皆さん。

境に陥ったが、「途中でもうドライビングスタイルを変えるしかないと考えを変えた」ことが後半のタイムに繋がったという。「昨日、何もなければ30秒差くらいは行けたと思います。まだまだやらなければいけないことは多いですけど、やっぱり慣れればVABの方が速い」と大輝選手は次戦に向けて抱負を語った。

長距離を走り込むがゆえに最後まで何が起きるかわからないのがラリーだが、今回のラリー北海道でも、各クラス、波乱が続く展開となり、結果、シーズン初優勝クルーが続々、生まれた。JN3クラスは、3連勝中の山本悠太／山本磨美組がLEG1をトップで折り返すも、LEG2でマシントラブルに見舞われてスローダウン。ラリーカムイでは苦杯をなめた曽根崇仁／木村裕介組が今季初優勝を達成した。

LEG1のSS6でリアダンパーにトラブルが発生したことが響いて首位の山本組に1分20秒近いビハインドを負ってLEG2をスタートした曽根組。「LEG2で急遽、代えたリアダンパーが合わなくて走りにくかったんですけど、悠太選手のペースが落ちてきたので、これは行けるかもしれない、と今日は全開で攻めました。昨日、トラブルの出た後のSS7を、ギャップに注意しながら何とか走り切れたのが大きかったですね」と曽根選手は苦闘のラリーを振り返った。

JN4クラスでも、今季からZC33Sスイフトに乗り換えた古川寛／大久保叡組が、33スイフトでの初優勝をもぎ取った。LEG1で勝負所となったロングのSS3、SS4でともにベストを奪取。特にSS4では2WD総合ベストを叩き出して波に乗った。このSSでは優勝候補筆頭の関根正人／草加浩平組がコースオフでリタイヤ。追われるプレッシャーから解放された古川組は、LEG1で稼いだマージンを最後までしっかり守り切った。

「前回の横手まではマシンの挙動がいまひとつ掴み切れなかったんですが、色んな方々にアドバイスを受けてセッティングを詰めて運転も変えてみたら、今回は思い通りに走れるようになりました。リアが出る動きを止めれるようになったことが今回は大きかったと思います」と古川選手。これでラリー北海道は2年連続で制した形だ。

一方、APRCはCUSCO RACINGがC-HRを初めて投入し、大いに話題を集めた。マイケル・ヤング／グレン・マクニール組はその期待に応えるかのように全16本のSSをすべてベストタイムで上がって、快勝を飾った。総合2位には、今回の一戦でラリー北海道からの『卒業』を発表した増村淳選手と、竹原静香選手のクルーが入賞。増村選手は、2001年のインターナショナルラリーイン北海道に始まる北海道開催の国際格式ラリーにすべて参戦したそのキャリアに、とりあえずの終止符を打った。

27.28. セレモニアルスタートでは、北海道開催のインターラリー皆勤賞という功績を称えて、増村淳選手に記念の盾が贈呈された。